

# 強者の戦略

論述世界史〔1989年 東京大学 第1問〕

こんにちは。研伸館の世界史の北林です。問題にチャレンジしてみてどうだったでしょうか。今回の問題は、

近現代史まで一度ざっと復習している人にとってはイメージしやすかったかと思います。問題の方にもふれましたが、頻出のテーマの一つでもありますので、復習の際には「明朝末期から清朝前期」や「洋務運動」の時代をしっかりと確認しておきたいところです。

## <時代背景を確認>

「明朝末期から清朝前期」

時期で言えば**16世紀後半から18世紀前半ごろ**になります。皇帝で言えば明なら万暦帝や、清なら康熙帝・雍正帝あたりを想像したいところです。この時期は西洋で言えば**大航海時代や宗教改革**の時代、そして**主権国家体制が確立し、王が絶対的な力を持っている**、そんな時代です。

16世紀に**スペインやポルトガルが積極的に対外進出し、それに伴ってカトリックのイエズス会が世界中に海外伝道に出ます**。日本にも16世紀にはフランシスコ＝ザビエルが訪れていますし、信長のときに南蛮貿易を行っていることは小学校時代にも習っているはずですが。中国にはマテオ＝リッチ、アダム＝シャル、ブーヴェ、レジスなどが訪れています。

「洋務運動」

18世紀後半から広州のみで貿易を許していた清朝ですが、この時期にイギリスが清朝と貿易をします。特に**茶の需要**がイギリスでは高まっていました。**産業革命**を経て**自由貿易**を推進して積極的に対外進出をしようとした。しかし中国は貿易を外国人に対する恩恵とする**中華思想の立場**を崩しませんでした。結局**海禁政策**を行っている清朝とは自由に貿易できず、輸入超過となり銀が流出し続けます。イ

ギリスはアヘンの三角貿易を行い、銀を回収しようとしたが、これがきっかけとなって1840年に**アヘン戦争**がおこり**南京条約**を結び5港開港、さらに追加して不平等条約をつきつけられます。

その後はイギリス・フランスと1856年から**アロー戦争**を戦い、1860年には**北京条約**を結び、弱体化に拍車がかかります。なおこの時期に**ロシアが中国東北地方に進出し、領土を獲得**しています(1858年アイグン条約、1860年北京条約など)。またこの戦争のころに**太平天国の乱**が起こり、清朝は自力で鎮圧できず、官僚達が持つ**郷勇**や、外国の力を借りた**常勝軍**などでようやく鎮圧ができたという状態です。

二つの時代はまったく背景が違いますが、ここから「ヨーロッパ文化を受容するにさいして示した態度の特徴」を見ていきます。

## <問われていることを確認>

- 1 「明朝末期から清朝前期」の「イエズス会士への対応」と「中国がヨーロッパ文化を受容するにさいして示した態度の特徴」

**イエズス会宣教師が訪れ、中国には様々な西洋の技術や文化が伝わりました**。官僚や儒学者などの支配者層・知識人達はこれに大いに興味を持ちます。明代には**実学**が流行して様々な科学技術書が作られます。そして庶民層より知識人の間で進んでキリスト教が受け入れられました。清代も宮廷で**イエズス会宣教師達が科学者や技術者として重用**されました。**アダム＝シャル**や**フェルベースト**は暦の改訂を行い、**ブーヴェ**は「**皇輿全覧図**」を作成しました。

多くの西洋のものが伝えられましたが、やはり宣教師達の一番の目的はカトリックの布教です。ただそこで大きな壁が立ちはだかります。一神教のキリスト教ですが、**中国に昔から伝わる孔子の崇拝や先祖の祭祀など、いわゆる「典礼」が中国には根付い**

# 強者の戦略

ており、これを否定しての布教は難しいと判断したのです。そこでイエズス会はキリスト教に改宗した信者に、儒教や典礼など中国の文化・伝統を認めました。

これに対し、遅れてきたドミニコ会やフランチェスコ会などがこの状態をローマ教皇に訴えます。ローマ教皇はこのイエズス会のやり方を異端だとしました。清朝第4代康熙帝は、典礼否認派の入国・布教を禁止しました。さらに第5代雍正帝の時代にはキリスト教の布教を全面的に禁止しました。ただ、日本のような厳しい弾圧はなく、科学技術に必要な宣教師は雇い続けました。

ちなみに今回の問題で書く必要はありませんが、こうした宣教師を通じて、ヨーロッパに中国の制度や文化が伝わり、自国と中国を比べて優劣を論じたり、シノワズリ(中国趣味)が流行したりします。東京大学2000年の第1問がこのあたりをテーマとしている問題です。

2 「洋務運動」と「中国がヨーロッパ文化を受容するにさいして示した態度の特徴」

アヘン戦争やアロー戦争で敗北し、さらに太平天国の乱でぼろぼろになってしまった清朝ですが、国内は一時的に安定しました(同治中興)。西洋との戦いや太平天国の乱の過程で西洋の武器の優秀さを痛感した官僚たちは、富国強兵を目指して西洋の学問や技術を導入して近代化を図ろうとします。これが「洋務運動」です。洋務運動の中心となったのは、太平天国の乱で郷勇を率いて活躍した、曾國藩や李鴻章、左宗棠などの漢人官僚です。兵器工場や貿易工場、汽船会社設立や、鉱山・電信など新事業に力を入れました。また海軍学校も創設しています。しかし清朝は「中体西用」を掲げ、中国の学問・文明を「本体」とし、産業・技術の導入が中心で、政治制度や社会体制の変革を目指すものではありませんでした。後に清仏戦争や日清戦争などの敗北で

この運動の限界が明らかになります。

以上から二つの時代には、西洋のものは受け入れるが、中華の文明の価値観や伝統を崩さないものだけ受け入れたという態度が読み取れたのではないかと思います。

では、以上を参考に解答文を作成してみましょう。

## 【解答例】

カトリックの伝道に訪れたイエズス会士は西欧の学問・芸術・技術を紹介、支配層や知識人は関心をもち、布教は進んだが、先祖崇拜など典礼を認めたイエズス会の布教方法をローマ教皇が禁止すると清朝はこれに反発し、典礼否認派を排除、後に布教を禁止した。アロー戦争などで敗れた清末期、洋務運動では西欧技術を導入で近代化して国力強化を図ったが、「中体西用」の考えのもと中国の伝統や制度を保存し、西洋の技術を利用するものであった。中国は西欧文化を受容するが伝統的政治体制・倫理・価値観を崩さないものに限った。(240字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、気になるころがあれば、その際は遠慮なく質問してください。添削を希望される方も遠慮なくおっしゃってください。

最後に過去にインターネット授業(E-Lecture)で使用した構想メモの画像を貼っておきます。

ではまた次回、お会いしましょう。

北林久忠

# 強者の戦略

問 1

近代初頭以降、西ヨーロッパ諸国と中国の間には、政治・経済・文化の諸分野でさまざまな交渉があった。これについて、以下の設問に答えよ。解答は解答用紙の（イ）の欄を用い、冒頭に（A）、（B）の符号を付して、それぞれ指定の行数以内で記入せよ。

（B）明朝末期から清朝前期にかけての時期のイエズス会士への対応と、清朝末期の洋務運動とを例にとり、中国がヨーロッパ文化を受容するにさいして示した態度の特徴を8行以内（1行30字）で述べよ。

## 明朝末期から清朝前期

時代が違っても受け入れる  
態度が共通している

対抗宗教改革の時期→イエズス会が布教に

西欧の学問・芸術・技術などを紹介→受け入れる

典礼問題がおこると典礼否認派は認めない。布教の禁止へ

## 洋務運動

アヘン戦争・アロー戦争で敗北→近代化を目指す 西洋技術導入

しかし「中体西用論」→中国の伝統はそのままに技術のみ模倣する

伝統的政治体制・儒教などの  
倫理・価値観を崩さないもの  
だけ受け入れる